

現代版わらしべ長者

これは実話です。

日本中部のある地方に「ろくさん」と言う人が居ました。本名は牛山六郎と言うのですが、周りの人々には「ろくさん」と呼ばれて親しまれていました。ろくさんは、生まれつき耳が聞こえない上に、いわゆる知恵遅れでした。そこで家族はろくさんを、中学を「卒業」してすぐに、知り合いの土建業者の親方のところに丁稚に出しました。

この親方は県からの仕事を主に請け負っていました。いわゆる公共事業です。ろくさんも工事の手伝いをさせられましたが、なにせ耳が聞こえないので、車が迫って来ても気付かない。危なっかしくて仕方がないわけです。もちろん仮にろくさんが車にひかれても、それは現場監督の責任であって県の責任ではない、理屈はその通りなのですが、やはり公共機関としては世間がそれで済まないわけです。新聞にも県が悪く書かれるでしょう。

そこで県は、「このままでは危ないから、ろくさんを県の嘱託に採用して、適当な仕事をさせておこう」と考えました。ろくさんは県の嘱託に採用されました。その後しばらくして、県の方針で常勤の嘱託は全員正の職員に採用されることとなり、ろくさんも目出度く県の正職員になりました。その頃のろくさんを知る旧職員によると、ろくさんは人間離れしていて、顔つきも歩く姿も、人間よりもチンパンジーに近かったと回想しています。でも立派なお役人様です。

さて、採用した県は、「ただ遊ばせておくと『税金の無駄遣い』と言われるので、何か適当な仕事をさせておこう」と考えました。しかし耳も聞こえず字も書けないろくさんに出来る仕事は限られています。最初は管理する川の分岐点の交通整理、と言ってもボタンを一つ押すだけですが、をやらせてみました。でもすぐに押し間違えて、事故を引き起こしそうになりました。そこでろくさんは事務所の隅に机をあてがわれて内勤となり、時々庭木に水をやったりゴミを捨てたり、あとは煙草を吸ったりぶらぶらする毎日となりました。

ある年の春、その課で花見に行くことになり、ろくさんも一緒に山に連れて行きました。ところがいつの間にかろくさんが居なくなっていました。皆花

見もそっちのけで探したけど見つかりません。とても花見どころではなくなってしまいました。後で分かったことですが、ろくさんはそこらをうろうろしているうちに道に迷い、たまたま通りかかった軽トラで、運良く家の近くまで運んでもらっていたようです。この事件以来、宴会にも駆り出されなくなりました。

そうこうしているうちに、そうは言っても年功序列の職場、ろくさんもやがて主任様に出世し、給料も相応に高くなりました。でも、決して偉ぶらないろくさんは、仲間のみんなに可愛がられては、庭木いじりやごみ捨てをする毎日でした。ろくさんは毎日の昼の弁当を実の姉さんに作ってもらい、その対価を給料から姉さんに支払っていましたが、このころになると姉さんは、ろくさんの3食作りだけで家族を養えるほどろくさんからもらっていました。

そんなろくさんにも定年がやってきました。でもろくさんには定年と言うことが理解できませんでした。上司や同僚が身振り手振りで色々理解させようとしたのですが、ダメでした。そしてろくさんは次の日も、また次の日も、ずっと事務所に来続けました。県としても通って来る人に給料を出さない訳に行きません。ろくさんは定年後も何年もの間、それこそ年を取って動けなくなるまで給料をもらい続けたそうです。

そのろくさんが、最近目出度く天寿を全うされました。ろくさんが高給と年金と恩給で建てた家は、ろくさんに妻子が居なかったのも、姉さんの親戚筋が相続したそうですが、葬式に出た人によると、それはもう御殿のように立派な家だったそうです。

おしまい

(お願い) ろくさんは今やもう伝説の人です。もっと詳しい情報をご存知の方は、当方までご一報ください。